

論文

## 児童養護施設におけるグループワーク実践 —スポーツ活動等を活用した支援技術について—

木村 秀  
(共立女子大学)

抄録：本稿は、児童養護施設におけるグループワーク実践について、スポーツ活動等を活用した支援技術について明らかにすることを目的とする。

また、スポーツ活動が児童期の発達を支援するだけでなく、虐待された子どもへの治療的なアプローチや、働く職員に求められる視点について論じている。児童養護施設におけるグループワークの取り組みは、里親やファミリーホームによる家庭養育とは異なり、行動化が激しく、里親養育では手に負えない子ども達への支援として欠かせないものである。グループワーク実践は、施設職員の支援技術の向上が求められるだけでなく、子ども同士の信頼関係や集団作り、治療的な養育環境の構築への効果があると考えられる。

キーワード：グループワーク、レクリエーション、治療的養育

### 1. 問題と目的

児童養護施設におけるグループワークは、様々な目的と形態で実践されている。松本(2018)のラグビーの実践では、スポーツ活動を通して、児童養護施設で暮らす子ども達の自尊心の向上に影響があったことを報告している。<sup>1)</sup> 森田ら(2007)は、思春期児童を対象としたグループワークの取り組みを報告し、思春期特有のテーマをもとに、ロールプレイやディスカッションなどを行い、子ども達相互の関係や、自立して生きていく上で必要なスキルなどを学ぶ場としてのグループワークの効果について言及している。<sup>2)</sup>

筆者の在籍した施設では、ユニットごとの子ども会議や、幼児、小学生、中学生、高校生などの年齢別に集団を構成して行われる活動(横割り活動と呼ばれ、子どもの生活するユニット間を超えて、施設全体で該当する年齢ごとの子ども集団を構成し、キャンプや遠足に行く活動を行っていた)や、習字クラブ、お琴クラブ、バンド活動など、特定のことを学んだり、楽しんだりする活動が行われていた。

しかし、このようなグループワークを行うこと自体が目的化し、何のために実施するのかが子ども、職員ともに曖昧なままで行われている活動や、施設外の団体が主催するキャンプやスポーツの活動グループに参加しているから、それで良いと考えてしまう例もある。これは、コノプカ(1967)が指摘するグループワークとレクリエーションを同義と捉える間違った認識のもとに実践されている活動であり、<sup>3)</sup> グループワーカーが行うグループワーク本来の意味を持った実践ではなく、単なる余暇活動として、子どもが経験しているだけである。

コノプカ(1967)は、グループワークの方法論が目指すものとして下記の6点について論じている。<sup>3)</sup>

1. 個別化。
2. 所属感の深まり
3. 参加の能力を基本的に養うこと
4. 理性的思考と集団協議に基づく決定に貢献する能力の涵養
5. 人々間の相異を尊重する気持ちを増すこと

## 6. 暖かく、また人を受けいれる社会的な雰囲気の醸成

また、ソーシャル・グループワーカーの使用する道具について、コノプカ(1967)は以下のものを挙げている。<sup>4)</sup>

1. 自分自身を、意識的専門的に活用すること
2. ワーカーと成員相互間の言語による相互作用
3. 個人の欲求と、集団の要請にかかわるプログラム活動を区別して用いること
4. 集団の成員の相互作用

このような原則を意識し、グループワーク実践を日々行っていく必要があるが、多くの施設職員は、子どもと共に生活を送る中で、グループワークとしての子どもへの支援を意識した関わりや、意図した関わりを常に行っているのではなく、自分の実践を省みて、これが良かった、これは改善しようと思うことの繰り返しをして試行錯誤しながら、グループワークが実践されているのではと考えられる。

本稿では、児童養護施設内で行われたグループワークである、セカンドステップ、フットサルクラブ、フットサルクラブの合宿活動等の実践についてふり返り、施設全体における効果や、子ども個人、子ども集団に及ぼす児童養護施設のグループワークの実践方法と効果について考察することを目的とする。

## 2. 実践されたグループワーク

本研究で取り上げる、児童養護施設において実践されたグループワークについて、内容、対象については以下の通りである。

### (1) セカンドステップ

対象：小学1年生～6年生 10名～30名程度

内容：写真やパペットなどの教材を活用し、表情から気持ちを読み取ることや、自分の気持ちの表現の仕方、トラブルの解決方法や、感情のコントロールの方法について、ロールプレイなどを通して学ぶもので、ソーシャルエモーショナルラーニング(社会性と情動のコントロールを学ぶプログラム)に分類される。様々なテーマ設定があり、「嘘をつきたくなかった時」「うっかりとわざと」「フェア」「盗みたくなかった時」「落ち着く」「ケガをした時」など、その場面で自分や相手がどういう気持ちになるか、どうしたら良いかなどをディスカッションする内容で構成されている。

また、子ども達が望ましい方法と考えるものについてロールプレイを行い、普段の生活の中でも実践できるように支援するものである。

この活動は、コノプカの示すグループワークの目指すものにおける、「理性的思考と集団協議に基づく決定に貢献する能力の涵養」や、「人々の間の相異を尊重する気持ちを増すこと」に取り組む内容であった。<sup>5)</sup>

### (2) フットサルクラブ

対象：小学4年生～高校3年生 10～30名程度

内容：フットサルとは、五人制のサッカーのような競技で、サッカーコート4分の1ほどのコートで実施するものである。サッカーと異なり、接触プレーは、基本的に禁止されていることから、女性の愛好家も多く、異年齢の集団でも楽しめる。また、コートが狭いため、走るなどの運動能力よりも、技術が求められる。

クラブとして活動する以前から、フットサルは行っていたが、高校生が夕食後に時間を持て余し、外出するよりは園内でできることをということで、不定期に活動が行われていた。そのような状況で子ども達の方から、定期的にフットサルをやりたいという声があがり、フットサルクラブの活動を始めることとなった。

園内クラブとしてフットサルを始めるにあたり、はじめにミーティングを行った。フットサルクラブへ参加するルールとして、クラブ活動への参加は最優先事項ではないので、生活のことができていない人は参加

できないこと、暴力を振るった時には参加できないこと、今日はテレビを見ていたいからクラブに参加しないということは許されないこと、ユニットの担当職員から参加を認めてもらえない人は参加できない旨を説明し、申込書に自分で記入し、自分の担当職員の署名を書いてもらい、持参することにした。

また、キャプテンを子ども達に決めてもらい、最高学年の子どもではなく、サッカーが上手で年下の子ども達の面倒をよくみる子になってもらった。本人は、先輩がいるからとキャプテンを譲ろうとしたが、筆者から見ても他の子どもたちから見ても適任であるという意見だったので、お願いし、了承してもらった。コノプカ(1967)は、集団の自然発生的リーダーとグループワーカーが積極的な関係を確立できると、危険な敵意の暴発を防ぐことができると指摘しており<sup>6)</sup>、結果として子ども達から選ばれたキャプテンが活動中の子ども間のトラブルを解決してくれることが何度かあった。

活動は、休前日の午後6時半～8時迄とし、月に4、5回くらいのペースで行った。はじめにリフティングを個人で練習し、その後パス回しやシュートを練習して試合をするという流れで活動を構成した。子ども達は速く試合をしたがったが、怪我をする危険を考えたことと、上達することを目標にし、必ず練習を行ってから試合をするという活動の流れを続けて行き、定着していった。単純にフットサルをやって、楽しかったという活動にはしたくなかったので、活動終了後に輪になって座り、ミーティングを行い、今日の自分の反省点を言ってもらうことにした。そのうちこのミーティングのテーマを子ども達に考えてもらうようにし、「右隣の人の良かったプレーを言おう」、「〇〇くんのすごいところを言おう」、「同じチームの人の良かったところを言おう」、「次回、がんばりたいことを言おう」などのテーマが子ども達から出され、ミーティングが展開された。この活動後のミーティングは、フットサルクラブへの「所属感の深まり」や「暖かく、また人を受け入れる社会的な雰囲気醸成」など、振り返るとコノプカ(1967)が示したグループワークの目指すものに該当する取り組みであった。<sup>7)</sup>

また、キャプテンを努めてくれた子どもの地域の友人二人にも参加してもらった。この二人は普段から施設へ遊びに来ており、施設の小学生や中学生達と一緒に遊び、慕われていたこともあり、職員達もよく知っている子ども達であったので、職員会議に諮り、参加してもらうこととなった。

基本的には筆者が毎回、担当して実施したが、他の職員で手が空いているものが一緒に参加し、筆者が不在の際には、代わりに担当してもらい、実施された。

### (3) 合宿 (フットサルクラブ)

対象：小学4年生～高校3年生 10～30名程度

夏休みと冬休みに1泊2日から2泊3日のフットサルの合宿活動を行った。予定はなんとなく考えられていたが、子ども達の意見やアイデアを反映してプログラムを組み、その時の子ども達の様子や、日中にも活動することもあり、フットサルクラブに入っていない子どもも一緒に参加出来るレクリエーションなども含めて活動を行なった。

通常、1日目の午前中の初めの30分程、ミーティングを行い、子ども達のキャプテンが「今回の合宿の目標を立てて、発表しよう」、「合宿が終わった時に、どんなことがうまくなっていたか発表しよう」などのテーマ設定をし、子ども一人一人が決意を述べてから始まる。基本的に日中や夕食後の時間は、フットサルを行うが、夕食後の活動のあとは、子ども達がそれぞれ自室から布団を持って、園内の大きな和室の部屋に集まり、サッカーのTVゲームをプロジェクターで大画面のスクリーンに映し出し、各ユニットのTVゲームのコントローラーを持ち寄って、4人対4人のサッカーゲーム大会に興じたり、寝転びながらカードゲームをしたり、おやつやアイスを食べながら、想い想いに過ごしたりと、普段の消灯時間を超えて遅くまで楽しむことが許される機会とした。

また、時期にもよるが、夜遅くに肝試し大会を行うこともした。肝試し大会は、高校生が中心となり、ルートを定めるなどの準備を事前に行い、職員も手伝った上で、メンバーのみんなを楽しませつつ、高校生達が楽しんでた。フットサルという活動を通じて、泊まりこみで遊びながら、時にはけんかが起こり、それを子ども達同士や職員が間に入ったりして解決しながら行なわれた。

食事や入浴などは、それぞれユニットへ帰って済ませてくるが、それ以外はほぼ一緒の時間を過ごす。長期休みで、家に外泊できない子ども達に何か楽しいことができないか、という先輩職員の話から、筆者が体験した合宿をベースにこの活動を展開した。

### 3. グループワーク実践とその効果

セカンドステップについては11年、フットサルクラブについては6年ほど実践した中で、園全体としての効果、子ども個人の効果というものを明らかにするのは難しいが、職員からの声として、以下のようなものが寄せられた。

子どもが自分の気持ちを言葉で表現するようになった。トラブルを子ども同士で解決する姿勢が見られるようになった。スポーツで健全に発散したからか、部屋の中で子ども間の暴力が減少した。暴力を振るったら1ヶ月参加できないルール（フットサルクラブ）が、抑止力になっていた。以前なら一緒に遊んでいても喧嘩になることが多かったが、子ども達同士で仲良く遊べるようになった。小さい子達がテレビを見たい時間に大きい子達が部屋からいなくなるので（フットサルクラブの活動に参加するため）、穏やかな時間が持てるようになった。

子ども同士でトラブルを解決するようになったことは、コノプカがグループワークの方法論が目指すものとして提示した、「理性的思考と集団協議に基づく決定に貢献する能力の涵養」という効果をもたらしたと考えられる。<sup>8)</sup>

また、子ども達からの声としては、楽しいという話がほとんどであったが、年下の子達を楽しませることも大事だとわかったという話や、それぞれ得意なことが違うこと、それを人に認めてもらえることが良いんだという話があがった。

これらの発言は、コノプカ(1967)の示した、個別化や、所属感の深まり、参加の能力を基本的に養うこと、人々の間の相異を尊重する気持ちを増すことなどの効果があったのではと考えられる。<sup>9)</sup>

筆者としては、スポーツを通して、勝つことの達成感、うれしさを感じると同時に協力すること、励まし合うことなどを体験できていたのではと考えた。また、フットサルのグループワークでは、同じユニット以外の中高生が適切なモデルとして、他のユニットの年下の子ども達に慕われることなどもあり、良い影響をお互いに及ぼしていたと推測される。

フットサルの活動では、うっかりぶつかったり、足を踏んでしまうことはあるが、セカンドステップで学習した、「うっかり」でも謝ることなどを子ども達が実践しており、それを見た職員からもナイスフェアプレーなどと声をかけたり、活動後のミーティングで話題にあげることで、褒められた子どもだけでなく、周囲の子ども達も望ましい姿勢を学び、子ども達のキャプテンも、積極的にそういう言葉かけをしてくれるようになっていった。このような雰囲気は、コノプカ(1967)が示したグループワークの目指すものにあげられた、「暖かく、また人を受け入れる社会的な雰囲気の醸成」が成されたと考えられる。<sup>10)</sup>

また、フットサルの活動を行っていく中で、どうせ言っても大人は何もしてくれない、だからムカつくという感じ方の子ども達に対し、言い方も大切であること、納得してもらおう材料となる行動や準備が必要であることを経験して欲しいと考えた。フットサルのグループワークを実践していく中で、子ども達からお揃いのユニフォームが欲しいという話があがったが、「どうせ学園はお金がないから買ってもらえないよ」と話す子どもや、「お小遣いで買いたいけど、高いから無理だろうなあ」と話す子どもがいたので、ネットで調べるとだいぶ安く購入できるのを見つけたことができた。それでも小学生のお小遣いの2ヶ月分であり、貯金がある子は買えるかもしれないが、そうでない子は買えないのは「フェア」だろうかセカンドステップで学んだワードで投げかけると、みんなが買える、もしくは買ってもらうのが良いという意見がほとんどであった。事務職員からは内々に購入の許可をもらっていたが、子ども達には、どうしたら買ってもらえるだろうか、と投げかけると、自分達がフットサルを続け、頑張っていることをわかってもらえないだろうかという話になり、毎回の活動の初めにしているリフティング

(ボールを落とさずに蹴り続けること)の回数がどれだけできるようになったかを報告して、見てもらったかどうかという話になり、2ヶ月程の活動の中で、リフティングの回数を記録し、回数がみんな増えて上達していることや、真剣に取り組んでいる姿勢を見てもらい、その結果、買ってもらえることになったということを子ども達に経験してもらった。この体験は、ユニフォームを買ってもらえるうれしさを話す子が大多数であったが、「頑張れば報われるんだね」、などと話す子もいて、練習に取り組む姿勢がさらに良くなった。

同じユニフォームを着て、練習することで、さらにグループの凝集性が高まり、みんなで努力して勝ち取ったということで、ユニフォームを大事にする子ども達の様子が見られた。ユニフォームを買ってもらったのを見たフットサルのクラブにまだ参加できない学年の子達が自分も四年生になったら入りたいと部屋の職員に言ってくるようになり、フットサルがやりたかったら、生活のことをきちんとできないと入れないんだよ、生活をきちんとできているからこそ、普段、許されないことが許されるという話をされ、自分の生活を振り返るきっかけになっていた。

これらの実践は、コノプカ(1967)のグループワークの意義における「所属感の深まり」や、「参加の能力を基本的に養うこと」に繋がって行ったと考えられる。<sup>11)</sup>

#### 4. 考察

児童養護施設において、スポーツ活動等のグループワークを実践した結果を振り返り、その効果や意義について述べてきたが、集団の成員間の相互作用に配慮することが求められるため、グループワークを実践することは難しく、グループを扱う技量が求められる。コノプカ(1967)は、グループワーカーになるためには、「四年制大学で、心理学を含む社会科学を重点的に勉強し、さらに社会事業大学院で二年間の専門教育を受けた上で、それを終えた後で、理論的に問題を処理する知性や、人種、問題の種別、見かけなどにかかわらず、人に暖かく接し、これを受け入れ、心底から人を助けようとする姿勢が求められる」としている。<sup>12)</sup> このような人材を今日の日本の児童養護施設で確保することは難しく、児童養護施設でのグループワーク実践は難しいと考えられる。

しかし、グループワークに関する知識を学び、経験を重ねることで、上記のような教育を受けていなくても、グループワークを行うことは可能だと考えられる。まずは、レクリエーションとは異なるものであるという視点を持ち、どのような目的でグループワークを行うかを整理し、実践したことからの振り返りから学ぶという方法で技量を高めていくことが現実的ではないだろうか。単なるレクリエーションとしての活動にするのではなく、子どもが主体的に考え、ディスカッションを伴う活動にするだけで、グループワークの要素を取り入れることができる。

子ども個人の抱える問題、課題に向き合い、子ども間の集団力動について学び、職員自身の子ども集団をまとめる支援技術や知識の研鑽を行うこと、グループワークの専門家からスーパービジョンを受けること、他職種とのコンサルテーションを受けることで、グループワーカーとして成長していけると考えられる。

コノプカ(1967)は、行事や活動によらないでもグループワークを行う能力を身に着けなければならないと述べている。<sup>13)</sup> 尾崎も同様に、児童養護施設のグループワークは、一定期間で終了するものではなく、日常生活との一連の流れが存在すしなければならないと論じている。<sup>14)</sup> 本研究では、スポーツ活動等を活用した支援技術としてのグループワークについて論じたが、普段の生活の中でもグループワークを意識し、展開することが子どもを支援し、職員が成長する機会となる。

本実践では、特定の職員がグループワークを担当していたため、特定の職員1人への負担が大きいことや、退職や異動などがあると、途端にそれを担える職員がいないために、活動ができなくなることが課題であった。職員の交代があった場合、無理に同じ活動を継続するのではなく、担当する職員の得意とする活動を子ども達に提供し、グループワークで学び体験する機会を提供することで、コノプカ(1967)の示したグループワークの目指すものを実現していくことが期待される。

また、フットサルクラブの活動については、女子児童の参加者も少数はいたが、男子児童が主であり、女子児童のグループワークも設定できれば良かったと考える。スポーツのような活動ではなくても、ガールズトークができるようなグループ設定なども特に効果があるのではと考えられる。

コノプカ(1967)は、グループワーカーは、集団生活の場を治療の手段として使いこなせる知識を持っていなければならない、さらに、その知識を他人に伝える能力を身に付けていなければならないと論じており<sup>15)</sup>、本研究のようなグループワークに関する実践や報告、論文が増えることで、グループワーク実践に取り組む職員の増加に繋がり、たくさんの児童養護施設の子ども達にグループワークが提供されることが期待される。

## 文献一覧

- 1) 松本充史 (2018) 児童養護施設のタグラグビー活動による児童の自尊感情形成の検証 児童養護実践研究 6, 1-12
- 2) 森田展彰・有園博子・肥田明日香 (2003) 児童養護施設における思春期児童を対象としたグループワーク 子どもの虐待とネグレクト 5(1), 185-198
- 3) ジゼラ・コノプカ (1967) 収容施設のグループワーク, 日本YMCA 同盟出版部, p 65-68
- 4) 上記3) p68
- 5) 上記3) p65-68
- 6) 上記3) p147
- 7) 上記3) p65-68
- 8) 上記3) p65-68
- 9) 上記3) p65-68
- 10) 上記3) p65-68
- 11) 上記3) p65-68
- 12) 上記3) p45
- 13) 上記3) p59
- 14) 尾崎慶太 (2008) 児童養護施設で展開するグループワークについての一考察 ～施設実践におけるグループワークの位置づけ～ 関西国際大学研究紀要 9, 1-11
- 15) 上記3) p119